

人は誰でも年を重ね、その過程でさまざまな病気、ケガになる可能性があります。

その一つに、認知症があることをご存じですか。

さまざまな原因で、脳の機能が低下する「認知症」

しかし、認知症は急に何もできなくなってしまうわけではありません。その人らしさが失われてしまうわけでもありません。

認知症の人も、そうではない人も、全ての人が住み慣れた地域で、その人らしく共に生きられる、活力ある共生社会。



オレンジ色は、日本の認知症支援のシンボルカラー。

暖かさを感じるオレンジは、「手助けします」という意味が込められています。

9月は認知症月間。認知症について、考えてみませんか。

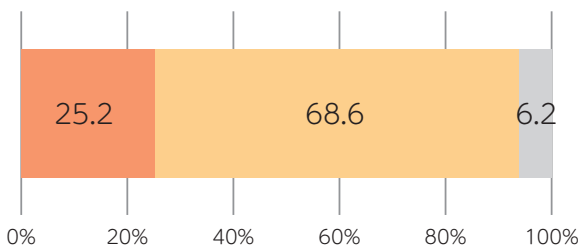
問合せ

高齢福祉課

☎ 22-0080

認知症の相談先を知っている人

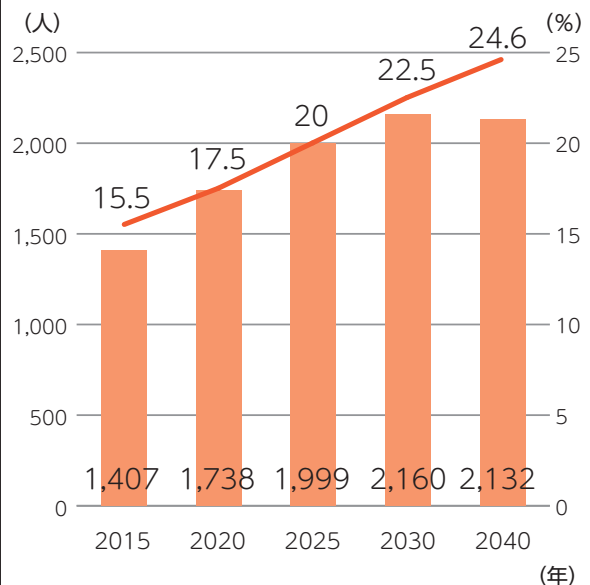
4人に1人



■ 知っている ■ 知らない ■ 無回答

将来は…

高齢者の4人に1人が認知症？



■ 認知症高齢者数
— 高齢者に占める認知症割合

● 認知症を取り巻く市の状況 (市高齢者福祉計画より)

● 認知症に「理解」を そのための「気づき」を

認知症になっても、その人らしく生きるには、周囲の理解が必要です。

そこで、理解を深めるきっかけの一つとして、「認知症サポートバッジ」が作られました。

外見からでは分かりにくい認知症。

「約束したことが分からない」「帰り道を忘れてしまう」などの困りごとを、地域での見守りや手助けで解決できることがあります。

このバッジを見かけたら、「こんにちは」

と優しく声をかけてみてください。

まずは、気に掛けることが、支援の一步に繋がります。

※認知症サポートバッジは、高齢福祉課の窓口で希望者に配布中です。

認知症サポートバッジ



見た目には現れない
状況を伝えるマーク

バッジの裏面は、氏名と
連絡先が記入できます。

● 認知症発見のポイントを 専門医に聞きました

日常生活で気づくポイントは

加齢に伴う物忘れでは、例えば、食事をしたときに、何を食べたかという「体験の一部」を忘れてしまうことがあります。

これに対して、認知症の記憶障害では、食べたこと自体「体験そのもの」を忘れてしまいます。

- ・その他にも、
- ・同じことを何度も言う
- ・人の名前が出てこない
- ・（病院などの）予約日を間違える・忘れてしまう

・怒りっぽくなり、近隣トラブルが発生するなど、
日々の生活の中で「おや？」と思うことを大切にしましょう。

離れて暮らす人の場合は

電話などで話して、会話が合わない時があったら要注意。

認知症は、新しい記憶ができなくなる場合があり、昔の記憶をもとに話すため、職場や住んでいる場所が食い違ふことがあります。

また、意欲が低下し、これまでの趣味や活動をやめてしまうこともあります。

最後に、メッセージをお願いします

近くに居ても、離れて居ても、なるべく密にコミュニケーションを取り、これまでの様子との違いに気付くことが大切です。

そのような違いに気付いた時には、早めに、専門の医療機関へ相談しましょう。

治療により、物忘れ等の症状の進行が穏やかになり、また、その後の介護サービス活用により、ご家族の介護負担を軽減出来ます。

その結果、ご本人とご家族が良好な関係を保ちながら、認知症に向き合っていくけます。



認知症初期集中支援チーム
認知症サポート医

医学博士 富田 直樹 先生

高萩それいゆ病院 精神科医長／
日本専門医機構認定 精神科専門医・指導医
精神保健指定医